

教員の書籍紹介



荒井 悠介 助教

若者たちはなぜ悪さに魅せられたのか
渋谷センター街にたむろする若者たちのエスノグラフィ―
荒井悠介著 晃洋書房

本書は、私が大学生の頃から続けていた、渋谷センター街でのフィールドワークを元に執筆したものです。本書では、渋谷センター街にたむろしていた不良の若者たち、彼らが悪さに魅せられていく理由とその後の人生を、20年の追跡調査を経て描き出しました。

この研究を続けてこられたのは、学部生時代より親身にご指導してくださった先生方や、ご協力してくださった方たちのおかげです。多くの方たちに助けていただいた分、当時の私のように問題意識をもつ学生の方たちを応援することで、恩返しをしたいと思います。(荒井)

鶴沢 由美子 教授

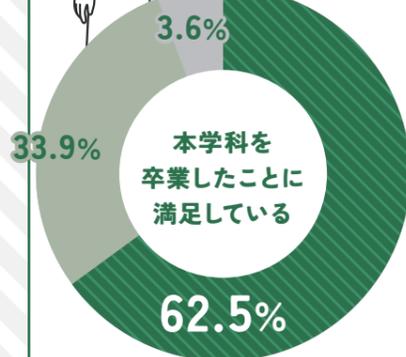


派遣労働は自由なのか
転換期のなかの課題と展望
大槻奈巴編著 青弓社

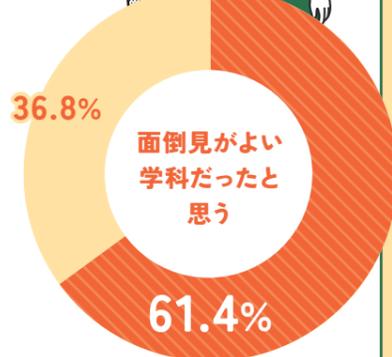
本書は、質的調査(インタビュー)・量的調査(1600人へのWEB調査)により派遣労働の課題と展望を検討したものです。筆者は「派遣労働を積極的に選択するのは誰か(第3章)」「2015年派遣法改正が増幅した(正社員)の多様化―無期雇用派遣社員とは:技術者を中心として(第7章)」を執筆しています。いわゆるメンバーシップ型雇用中心の社会である日本において、ジョブ型雇用と言われる派遣労働。学生の皆さんが、これからのキャリアの中で経験する可能性のある働き方でもあり、是非ご一読いただければ幸いです。(鶴沢)

SURVEY

2022年度卒業生アンケートから



人間社会学科では毎年、卒業式の日アンケートを行っています。
「本学科を卒業したことに満足しているか」という質問に対しては、62.5%から非常に満足、33.9%からやや満足との回答を得ました。9割以上の学生が満足して卒業したことがわかります。
「面倒見がよい学科だったと思うか」という質問に対しては、とてもそう思う61.4%、ややそう思う36.8%で、ほぼ全ての学生が面倒見の良さを実感しているようです。ちなみに「教職員による学生サポートに満足しているか」という問いへの回答は「非常に満足している」64.9%、「やや満足している」28.1%でした。(天野)



2023.Oct
Vol.32

MEISEI UNIVERSITY

JiN-SHA YELL



明星大学 人文学部人間社会学科
ニュースレター
DEPARTMENT OF SOCIOLOGY AND HUMAN WELFARE

人間社会学科、略して「ジンシャ」。ジンシャに関わるすべての人にエール(声援)を送ります!



松本さん



人間社会学科独自のキャリア支援スタート!

人間社会学科(人社)は、お陰様で面倒見のよい学科としての評価を得ています(4面ご参照)。今年度はその方向性のもと、「教育の明星」予算を用い、5月後半から学科独自のキャリア支援を始めました。週2回ないしは週3回、経験・知識ともに豊富で学生に寄り添ってくださるキャリアカウンセラーさんを招聘、早くも今年の4年生の就活にその成果が表れています。
具体的に事例を挙げましょう。事例① 就活に出遅れ、何から始めていいかわからなかった学生が毎週のようにカウンセリングを受け、自分の適性を把握して複数内定を獲得。事例② 公務員と一般企業の就活の両立に疲弊していた学生は、「交通整理」をしてもらい見事望み通りの結果を得る。事例③ 年々早まる就活で早々と内定を得たものの、その内定先に不祥事があった学生が友達に促されカウンセリングを訪問、気乗りのしない就活をリスタート。適切にサポートしてもらい、当初の内定先より志望度の高い内定を獲得。
このように事例を挙げればきりがありません。就活が早まっている現在、内定をもらっても就活の止め時がわからなくなることも

あるのですが、そういう少し贅沢な悩みにもきちんと対応して頂きます。納得して就活を終え卒業に集中したり、残る学生生活を楽しむ学生の姿を見るにつけこちらも本当に嬉しくなります。
4年生のサポートは最後まで続ける一方、9月後半からは3年生の相談が多くなるということでカウンセリングの日数を増やし強化しています。また、前期から続けている各3年ゼミへのカウンセラーさん訪問を続け、11月14日には例年実施する「ようこそ先輩」のイベントの拡大版を予定しています。4・5限は2年3年生向けに、就活を終えた4年生に登壇してもらいパネル・ディスカッションとグループごとの質疑応答を、6限には食堂を借り切り、様々な分野で活躍する卒業生や前述の4年生、教職員やカウンセラーさんと交流する会を企画しています。さらに、1年生向けにも近年変わりつつある就活に向けた導入の授業を計画しています。
このように、人社は学生たちに多面的にエールを送り、支えている学科です👏!
(鶴沢由美子)



Honda
本多ゼミ

休学という選択、離島での成長

4年
湯本 拓さん

私の大学生生活は2年から講義がコロナにより非対面になったりイレギュラーなこともありましたが、充実した大学生活を過ごしていました。3年になり就職活動が間近になった時に、働く意義が分からず、家族とも相談しこのまま就活をするよりも自分を見つめなおす期間として休学することにしました。

休学中4月から3ヶ月間私は島根県にある海士町で役場職員として長期インターンをしていました。内容としては移住と就労を通して島での暮らしを考えるというものでした。その中で、町のDX化を目的とした「スマホ相談会」というイベントの発案から企画、運営まで行って行っていました。その中で多くの人と関わり、まず行動してみるというのが最も重要なことに気がつきました。

私は数ある選択肢の中から休学を選び、他人から見たら遠回りの選択をしたのかなとも思います。休学中の1年間は結果として私なりの答え出すための1番の近道であったと考えます。これからも常に挑戦する姿勢をもちながら自分らしく活躍していきたいです。



海士町役場での勤務中の様子



シェアハウスでの一コマ

筆者み

Kumamoto
熊本ゼミ

団地で広がる可能性

熊本ゼミでは、大学から徒歩10分のところにある高幡台団地での活動を長年つづけています。今年には久々に対面での活動を再開しました。

まず6月は団地の防災イベントに参加しました。住民の方々といっしょに防災訓練に参加したり、スマホをつかった防災情報の入手方法や、在宅で避難生活をおくるために準備しておくべきことについてレクチャーしたりと大活躍でした。

7月は夏祭りです。猛暑のなか、祭りの運営をサポートしながら、自らも出店をだして盛り上げに貢献。多くの子どもたちでにぎわう、楽しいお祭りとなりました。

高幡台団地をはじめ、多摩地域にある団地の多くでは、極端な少子高齢化が進んでいます。その一方で多摩地域には、たくさんの大学

も集まっています。少子高齢化が進む団地の近くに、若者が集まっている大学がある。両者が手を結ぶことで、いろんな可能性が広がります。(熊本)



棒と毛布でつくった担架でケガ人を運ぶ訓練



わなげに群がる子どもたち。チョコバナナも販売しました。

室内対策をわかりやすく説明。消防士からもほめられました。



協力しながらストロウタワーを立て
計画 → 実行 → 確認 → 改善 の流れを学ぶ 1位は192センチ!!

初年次
教育

人間社会学科1年生交流会

人間社会学科の有志の上級生が企画運営する1年生交流会を2回実施しました。1年生からは「不安もありましたが、今日の企画を立てていただき、同級生、先輩方共にコミュニケーションが取れて良かったです。これからの学校生活が楽しみになりました」「みんなで考えることで、会話がが増えて仲も深まったと思います、楽しく学べる企画をありがとうございました!」「先輩方が親身に優しく声をかけてくださり、とても嬉しかったです。ありがとうございました!」といった声が聞こえてきました。

上級生からは、「今回、運営の立場を引き継ぎ、改めて先輩たちの優しさや人間社会学科の良さを実感しました。1年生が、楽しみながら交流してくれる様子を見て何よりです!」「準備では、



みんなで夜遅くまで試行錯誤しましたが、1年生たちが打ち解ける姿を見て本当に嬉しかったです。学年問わず関わることで勉強面でも刺激をもらえます。色々な人と関わり、色々な考えを聞いて、実り豊かな学生生活を送ってほしいことを願っています!といった言葉をいただきました。1年生のみなさん、どうか充実した学生生活を送ってください。上級生のみなさん、ありがとうございました!

初対面の同級生と絵のしりとりで打ち解ける



企画運営に取り組んだ上級生



マーシャル諸島からやってきたエヴェレンさんと出会って



Takemine
竹峰ゼミ

「唯一の被爆国日本」と言われますが、67回もの核実験が繰り返された太平洋の島国があります。マーシャル諸島です。そのマーシャル諸島政府の核問題委員会(NNC)で、核実験のことを語り伝えているエヴェレン・ラルホさんが来日し、ゼミで交流会を開きました。

エヴェレンさんのお母様は8歳の頃、水爆ブラボー実験で被爆しました。家族のことに関心を持つ私は、家族と引きつけながらエヴェレンさんの話を聞きました。

家族が被爆しても、みんなエヴェレンさんのように精神的に行動できるわけではありません。大学時代にお母様から送られた本で、流産を繰り返したことなどお母さんの壮絶な体験を知ったことが、大きなきっかけになったと、エヴェレンさんは言い

ます。食事会も終わりに差し掛かった時スマホで、ビデオ通話をするエヴェレンさんと息子さんの笑顔がありました。愛する家族が核被害の継承活動の原動力になっているともエヴェレンさんは語ります。

波乱があいながらも愛のある家族の関係を築くことや、身近にいる人を大切にする、そんな小さな心がけを土台に、公正な平和な社会を求め、自分たちの体験を世界に訴えていく。その力強い姿に魅せられたわたしは、別れ際に思わず「I love you」と駆け寄りました。

来年3月1日には、ゼミ生や他大の学生とマーシャル諸島に行き、エヴェレンさんと再会し、核被害追悼記念日の式典にも参加してきます。

エヴェレンさんとゼミ生らとの交流会 @第五福竜丸展示館にて



にしおふうこ
2年
西尾美卵子さん

別れ際にエヴェレンさんに声をかけて

